



静岡の御茶

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなかり



家康公は大変にお茶を愛された方でした。

その家康公は慶長十年（一六〇五年）將軍在位僅か二年で秀忠公に將軍位を譲り、御自分は駿府に移られる決断をして上洛されましたが、その途中駿府に約一か月滞在され、安倍郡井川郷の郷士、海野・朝倉の二家に「お茶詰御用」を命じました。お茶詰め御用はお茶を摘み、碾茶を作り、茶壺に詰めて保管するお役目ですが、両家は「大日峠にお茶蔵を建設しました。夏涼しく、常に霧が掛かる土地に一定期間保存することが、品質管理と熟成に適していたのだと思います。」

家康公の晩年は駿府の大御所として、専ら外交政策を進められると共に、時間を作っては近郊の山野を若い御家来をお伴に歩かれる「鷹狩」が大好きでした。鷹狩と

お茶を愛飲されることが健康の秘訣であったわけですね。

近年、お茶の薬効が次々と明らかになってきていますが、家康公に言わせれば「そんなことはお茶を飲めば解る」と一言で片付けられてしまうだろうと思います。

三代將軍家光公の時代になって公式行事として始められた「お茶壺道中」は、毎年の新茶を宇治から江戸城に運ぶ行列ですが、撰家、宮門跡の道中に準ずると云う大変に格式の高いものでした。途中久能山東照宮に祀られる家康公に新茶の壺が献納されたことは当然のことです。（この格式の高い大行列を差配した下級の武士には一世一代の晴れ舞台だったので、随分と威張り返ったものだったようです。童謡に「茶壺に追われてトッピンシャン

（戸をピシヤンと閉める）、（行列が無事を通り）抜けたらドンドコシヨ（ドッコイシヨと安堵する）」と謡われています。なんとも御迷惑をお掛けしたのですが、この御迷惑な行列は緊縮財政を行った八代吉宗公の時に簡素化されました。）

明治に入って短い間ですが徳川家は駿府七〇万石の大名として家康公の愛された駿府に戻りましたが、多数の武士は職に着けず、刀を鋤鍬に持ち替えて牧の原の開拓に邁進しました。（後に架橋された大井川の川人足の集団も武士たちに加わりました。）

来年の「世界お茶まつり」は春の牧ノ原会場と秋のグランシップに分けて行われることになっています。新緑の美しい茶畑に多くの外国人が感激するでしょうが、開拓にあたった幕臣の方々の霊も本当に喜んでくれるものと思います。

静岡市は2002年に井川・大日峠のお茶蔵を復元し、毎年10月末、家康公が眠る久能山東照宮まで「駿府お茶壺道中行列」を再現しています。